

北九州市立大学
国 際 論 集

第 19 号

社会科学系論文

2019 インドネシア・スタディツアーに観る ESD（持続可能な開発のための教育）の
概念の理解に関する研究

..... 三 宅 博 之 51

北九州市立大学 国際教育交流センター

2021年 3 月

2019 インドネシア・スタディツアーに観る ESD (持続可能な開発のための教育) の概念の理解に関する研究

三宅博之
(法学部政策科学科)

キーワード

ESD (持続可能な開発のための教育) インドネシア
スタディツアー 北九州市立大学三宅ゼミ

要旨

2019年9月16日から27日までの12日間、北九州市立大学法学部政策科学科三宅ゼミの2年生と3年生がインドネシアへのスタディツアーを実施した。それまでに途上国を旅した学生は非常に少なく、経済成長が著しい新興国のインドネシアは三宅ゼミが教育対象としている ESD や環境教育の学習材料を数多く提供してくれる。今回のインドネシア・スタディツアーを通して、インドネシアの環境、社会、経済といった様々な部門を知ることができたと同時に、学生自身も ESD の様々な能力を習得することができた。今回のインドネシア・スタディツアーを ESD の視点から考察を行った。

1. はじめに

2020年1月以降、新型コロナウイルスが日本に急速に感染拡大する中で、私たち人類は今までに慣れてきた日常生活が妨げられ、日常の新しい生活様式への転換という言葉を知り、実行することが求められてきた。

日常の新しい生活様式の下で、大学教育もその在り方の転換を迫られている。特に、北九州市立大学法学部政策科学科では、「政策実践プロジェクトⅠ・Ⅱ」という現場学習を基調とする科目が設定されており、三宅ゼミでは、積極的に現場学習に取り組んでいる。というのも、この現場学習は、三宅ゼミが学習の対象としている ESD (持続可能な開発のための教育) の概念と合致するからに他ならない。現実の問題を解決するために実態を知り、その中から解決方法を見出し、行動するといった目的で、フィールドワークを重視し、ESD (持続可能な開発のための教育) の視点から1年次から3年次にかけて様々なフィールドに出かけている。1年次には北九州市小倉北区沖の玄界灘に浮かぶ藍島に本学近隣の地区の小学生と出かけ、マップ作り、ビーチクリーニングなどのアクティビティを通じて環境学習や ESD を実践する。同時に、韓国南部に出かけ、ESD に力を入れている統営(トンヨン)市のセジャトラの森(環境教育センター)を訪れ、様々なプログラムを通じて ESD を学び、さらには、韓国海洋大学の学生と合同セミナーを開き、日韓の社会や大学生の意識を比較する。2年次と3年次にはフードバンク北九州ライフアゲインと連携して、年に2、3回学内でフードドライブ(家庭から食べそうもない食品の持参と提供)を行っている。また、2019年9月16日から27日までの12日間のインドネシアへの(ESD)スタディツアーを行っている。それらの成果は、三宅ゼミ論集の中に報告されている。

しかし、上記の報告書は学生が作成したもので、教員として筆者自らは同インドネシア・ツアーに対して論考を試みていない。よって、本論では、ESD の視点からインドネシア・スタディツアーについて分析・考察を行いたい。分析方法として、三宅ゼミ論集(報告書)に書かれたツアーの内容を ESD の諸構成要素の視点からとらえ、同時に、事後感想文の中で ESD に関わるものを整理し、どのような学習方法・能力・価値観を養う機会を提供したのかを示したい。

第1章 北九州市立大学法学部政策科学科三宅ゼミの取組み～ ESD (持続可能な開発のための教育) の観点から

第1節 ESD (持続可能な開発のための教育) とは？

2002年ヨハネスブルグで開催された国連総会で、持続可能な開発のための教育(ESD)が日本政府と NGO によって提案され、採択された。2005年から2014年までを「国連持続可能な開発のための教育の10年(UNDESD)」と定め、世界各国において ESD が推進されることとなった。

では、ESD とは何を意味するのであろうか。「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」の締めくくりで開かれた名古屋大会では、「全ての人々が持続可能な未来の実現に必要な知識、技能、生活態度、価値観を身につけることができる教育・学習を意味しており、ESD では、気候変動や災害リスク軽減、生物多様性、貧困削減、持続可能な消費など、持続可能な開発を実現するにあたり人類が直面する主要な問題を授業や学習に取り込んでいる」と述べられている。

(<http://www.unesco.org/new/jp/unesco-world-conference-on-esd-2014/resources/what-is-esd/>)

また、国連総会に提案した日本の NPO である ESD-J の定義によれば、持続不可能な社会で生きてきた自分自身の変容を通して社会変容の促進をはかるという教育である。もう少し詳しく言えば、ESD の理解ポイントとして次の 4 つがあげられている¹。ESD によって、「どのような人を育てたいか？」との問いに対して、学習者が自ら価値観を見つめなおし、再構築でき、さらに、自分の考えに基づき、主体的な行動を行える人を育てるとされ、「どこで行われるものか？」に対しては、学校教育、社会教育、市民教育、企業内教育、市民活動などすべての教育の場において実践されるものとされている。また、「誰に関わってほしいか？」に対しては、子ども、大人をはじめ、地域のあらゆる立場の人たちが対象である。取り組むテーマについては、ESD は分野を越えた多様なテーマを対象とするが、必ずしもすべてを一度に扱わなくてもよく、一つの課題を掘り下げること、おのずとつながってくるテーマに、総合的に取り組むことができるとしている。

さらに、学習方法、育みたい能力及び育みたい価値の 3 点があげられている。すなわち、学習方法は、1. 参加体験型の手法が活かされている、2. 現実的課題に実践的に取り組んでいる、3. 継続的な学びのプロセスがある、4. 多様な立場・世代の人々と学べる、5. 学習者の主体性を尊重する、6. 人や地域の可能性を最大限に生かしている、7. 関わる人が互いに学びあえる、8. ただ一つの正解をあらかじめ用意しないである。

育みたい能力は、1. 自分で感じ考え抜く力、2. 問題の本質を見抜く力・批判する思考力、3. 気持ちや考えを表現する力、4. 多様な価値観を認め尊重する力、5. 他者と協力して物事を進める力、6. 具体的な解決方法を生み出す力、7. 自分が望む社会を思い描く力、8. 地域や国、地球の環境容量を理解する力、9. 自ら実践する力である²。最後に、育みたい価値観としては、1. 人間の尊厳はかけがえない、2. 私たちには公正な社会を作る責任がある、3. 現世代は将来世代に対する責任を持っている、5. 人は自然の一部である、6. 文化的な多様性を尊重するがあげられている。

日本だけではなく、世界各国で ESD が展開される際に、このような ESD の概念が共通にあったことを忘れてはならない。日本の政府レベルでは、文科省と環境省が指南役になり、地方と連携を取りながら ESD を進めていった。北九州市も 2006 年にユネスコによって RCE に認定され、北九州 ESD 協議会を設立³、学校などの教育機関、市民センター、NGO、企業などを加

盟団体としながら、ESD を促進していった。北九州市立大学の役割は大きく、代表、副代表職への着任、まなびと ESD 講座の開設、地域創生学群の ESD プロモート実習グループによるツキイチの集いの開催などがある。北九州市立大学でも、地域創生学群や他学部、地域共生教育センター（通称 421Lab.）を中心に ESD が取り組まれた。筆者が所属する法学部政策科学科においても、政策実践プロジェクトといった科目に代表されるように実践型教育が行われており、現実社会の課題を探し出し、調査し、社会実験などを通じてその解決策を探るという内容はある意味において ESD と位置付けることができる。その中に三宅ゼミがあり、ESD や環境教育に焦点を当て、教育を進めていっている。では、次に三宅ゼミでは具体的にどのようなことを行っているかを紹介したい。

第2節 政策科学科カリキュラムとの関わりでの三宅ゼミの取組み

三宅ゼミでは、環境教育や ESD を対象として理論学習と参加型体験学習の双方を取り入れて、ゼミ運営を行っている。ここ数年は、次のような4つのプロジェクトを展開している。藍島プロジェクト、まるごと韓国プロジェクト、食品ロス削減学生プロジェクトならびに途上国 ESD ツアーである。前節で述べた ESD を網羅的に学習できるようにプロジェクトを体系化している。ここで、それぞれのプロジェクトを紹介しよう。

まずは、藍島プロジェクトである。北九州市の表玄関の小倉駅から徒歩 10 分で馬島・藍島渡船乗り場に着き、そこから小倉丸に乗り 35 分で玄界灘に浮かぶ藍島に到着する。藍島は、南北の距離は 2km、東西は 300m 程度の細長い島である。工業都市をイメージさせる北九州市にあって、漁業を主産業にする島である。以前は多かった人口も今は 250 名ほどになり、人口減少の一途をたどっている。漁業の後継者が減り、島を離れて住む若者が多いからである。ユネスコスクールに認定されている藍島小学校があるが、児童数は 4 名である。そのような藍島の自然は豊かであり、北九州にもこのような自然豊かなところがあったのかを教えてくれるところである。いわば、北九州市の生物多様性、自然的資源を学習する場を提供してくれる。藍島プロジェクトは、2 つから成り立っている。最初は、プロジェクトを担当している 2 年生や 3 年生が 5 月か 6 月に 1 年生を藍島に連れていき、スタンプラリーなどのアクティビティを用いて藍島の自然や産業を紹介する。さらに、夏休みに大学近くの子ども会の子どもたちや保護者とともに藍島に一緒に出かけ、1 年生の際と同様にスタンプラリーを通して藍島の歴史（白洲灯台、旗柱台など）、社会・経済（漁業）及び自然（千畳敷、浸食の影響を受けた砂岩、カメノテなど）を学習する。北端の千畳敷では楽しいアクティビティを通してビーチクリーニングを行い、分別した漂着ごみの袋を廃棄物集荷場まで運ぶ。ここには、持続可能な開発のためにバランスを取らなければならない社会、経済、環境のすべての要素が含まれている。

次に、まるごと韓国プロジェクトを紹介しよう。北九州市は韓国と約 250km の距離にあり、福

岡空港から釜山までは航空機でわずか40分しかかからない。近年、LCCの就航で運賃も非常に安くなっている（往復1万円から1万5千円）。このような地理上の利点を活かす形で、同プロジェクト担当の2年生や3年生が1年生を韓国に連れていく。旅券（パスポート）を有している1年生もいるが、大半は取得していない。日本語が通じない外国を知ることで文化的多様性の存在を認識することになる。また、日本と韓国の外交関係の悪化がマスコミで大きく報じられることで大学生は現実の韓国を知らずに、そのままその情報を信じている場合が多い。そのことが嫌韓感情を持たせることに繋がっている。一方で、K-popなどの影響で共感できる文化が存在することも知っていて、大学生にとって韓国をどのように理解すればいいのか困惑させているのが現状である。よって、参加型体験の重要性を強調しているESDを学習する者としては、実際に韓国を訪問し、自らの五感を用いることで自らの韓国像を構築することが重要になってくる。韓国で早くからRCEに認定された統営(トンヨン)のセジャトラの森(環境教育センター)訪問、近くの壁画村の視察、さらには本学の交流協定校である釜山の韓国海洋大学で行われる日韓交流セミナーへの参加(英語でテーマ別発表を行う)、その後の夕食交流といった内容がまるごと韓国プロジェクトの中心である。このようなESDプログラムを通して、自らの韓国像を構築する。1年生は、初めての外国旅行の楽しみを知り、旅券をさらに使いたくなり、一人で外国に行ける能力を少しでも養おうとしている。ここでは、文化的多様性を学習し、自らの参加型体験を通じて解答を導き出すというESDの能力の形成が目的とされる。

3番目の食品ロス削減学生プロジェクトは、食品ロス問題といった社会・経済的な問題をプロジェクトの対象にしている。現在、日本では食べられるにもかかわらず、廃棄されている食品が620万トン生じているといわれ、それを少しでもなくそうとフードバンク事業が各地で展開されている。フードバンク北九州ライフアゲインもその一つであり、会社や家庭から食品を回収し、必要とする人々に配布している。フードバンク事業の中に、一般家庭から食する予定のない食品を寄付してもらおうというフードドライブがあるが、フードバンク北九州ライフアゲインでは年に2～3回の実施を定例化している。三宅ゼミの食品ロス削減学生プロジェクトの学生も大学でブースを出し実施している。今年度(2020年度)は、新型コロナウイルスの感染拡大防止により、大学への入構が制限されたため、フードドライブを取りやめ、近くにある北方市民センターの協力のもと、フードバンク北九州ライフアゲインと連携し、新型コロナ禍の下で経済的に苦しくなった学生を対象に食品・弁当提供を行うというフード・パントリーを2回実施した⁴。また、北九州市のフードバンク事業と連動したSDGsについて楽しく小学生中学年以上の児童に理解してもらうために、「北九州もったいないっちゃ!すごろく」を製作している⁵。このような活動もESDに結びつく。

最後はインドネシア・スタディツアーである。外国へのツアーとしては韓国ツアーを先述したが、韓国はOECD加盟国であり、現在、特に社会構造面においては日本と同様の問題を抱え

ている。その意味で、経済開発が優先され、環境を犠牲にするような開発政策がとられている新興国のインドネシアは韓国とは社会経済構造が全く異なる。例えば、経済面ではインドネシアは労働力として人材を韓国に送り出しており、他方、韓国は、農業、漁業などの第1次産業、製造業・建設業などの第2次産業での労働力不足を補うために積極的に受け入れられている。このように韓国とは異なる面を持つインドネシアに出かけ、途上国でESDを学ぶということは、世界的な視点で物事を俯瞰するというESDの視点の一部に合致する。

以上をまとめると、三宅ゼミは北九州という地域的な視点と国際的な視点からのアプローチ、環境を中心としながらも社会・経済問題にも多少とも関わっている分野をその教育の対象にしていることが理解できる。

第2章 2019年度インドネシア・スタディツアーの概要

第1節 スタディツアーの旅程とその特徴

先述のように、三宅ゼミでは途上国ESDツアーを行っている。行き先としてはインドネシアが多いが、バングラデシュもこれまで3回出かけた。2019年度はインドネシアに決定していた。ここでスタディツアーの日程とその特徴を紹介しよう。スタディツアーの日程は以下に記している。

9/16 (月) 1日目

移動: 福岡→マニラ (ニノイ・アキノ国際空港) →デンパサール (ングラ・ライ国際空港) (空路)

9/17 (火) 2日目

移動: デンパサール→ジャカルタ (スカルノ・ハッタ国際空港) →スマラン (アフマド・ヤニ国際空港) (空路)

9/18 (水) 3日目

移動: スマラン→プカロンガン (陸路)

クルラハン (郡) の役場の職員の話聴く

プカロンガン大学の学生とバンデンガン洪水地区を視察

マングローブ・パーク視察

9/19 (木) 4日目

プカロンガン大学でのセミナー: 日本とインドネシアの災害についての情報交換

移動: プカロンガン→スマラン (陸路)

9/20 (金) 5日目

移動: スマラン→カリムンジャワ本島 (空路)

移動: カリムンジャワ本島→パラシ島 (海路)

ソーラーパネル施設を視察

島の人人々との交流（島のライフラインについての学習）

9/21（土）6日目

島の自然・社会状況を観察

シュノーケリング（サンゴ礁の生態観察）

移動：パラ島→カリムンジャワ本島（海路）

9/22（日）7日目

移動：カリムンジャワ本島→スマラン（空路）

カンブン・プランギ（壁画村）視察・聞き取り調査（※韓国統営市の壁画村との比較）

9/23（月）8日目

ジョンプラン地区クルラハンホール（郡ホール）で地域住民との交流

ディボスゴロ大学の学生とジョンプラン地区を視察・半構造型調査（JICAのコンポスト事業の継続性について）

スマラン市のエコスクール視察

BINTARI財団（環境NGO）のスタッフとの夕食交流会

9/24（火）9日目

移動：スマラン→スラバヤ（ジュアンダ国際空港）→デンパサール（空路）

移動：デンパサール→ウブド（陸路）

トゥグヌガン瀑布公園の滝視察（バリの自然の体感）

9/25（水）10日目

ウブド王宮視察とバリ・ヒンドゥー舞踊（ラーマーヤナ）文化鑑賞

9/26（木）11日目

ライステラス（棚田）視察

移動：ライステラス→クタ→デンパサール（陸路）

9/27（金）12日目

デンパサール→マニラ→福岡（空路）

インドネシアと一語で表現しても、その多様性には驚かざるを得ない。東西5000km、南北2000kmで、13,500弱の島からなる島嶼国である。今回のツアーではその島の中の、ジャワ島とバリ島に出かけたに過ぎない。にもかかわらず、航空機による移動には多くの時間を費やした。その移動面も含めて今回のツアーには数々の特徴があるので、それを説明していきたい。まず、航空機による移動である。航空機を使用したのは、国際線が、福岡—マニラ、マニラ—デンパサール、デンパサール—マニラ、マニラ—福岡である。特に、福岡空港からのマニラ発は午後3

時 30 分発でマニラに午後 6 時 25 分に到着する。そこで 2 時間 10 分待ち、マニラを午後 8 時 35 分に出発、バリ島のデンパサールには午前 0 時 10 分に到着する。ホテルに到着したのは、午前 1 時を過ぎている。帰りの航空便はかなり強硬である。デンパサールを午前 1 時に出発、マニラ到着が午前 5 時 25 分、さらにターミナル内で 4 時間 20 分待ち、午前 9 時 45 分に福岡に向けて出発である。ターミナル内にはほとんど開いている店もなく、全員はかなり疲労していた。

なぜ、このような航空便を選んだのかは、当時のフィリピン航空の航空運賃の安さである。学生の要望は、できるだけ安い航空運賃の航空便を選んでほしいといったものであった。福岡からデンパサールまでは、韓国のインチョン経由の大韓航空・アジアナ航空、台北経由の中華航空、上海経由の中国東方航空、香港経由のキャセイ・パシフィック航空、バンコク経由のタイ国際航空、シンガポール経由のシンガポール航空など数多くがある。中でもフィリピン航空は往復で 5 万 1 千円であった。他は、通過都市に一晩宿泊しなければならないか、10 万円近くになるかであった⁶。フィリピン航空は安いだけあって、座席の前方に小型スクリーンはついておらず、通常であれば、映画鑑賞などで時間をつぶせるが、それもできない。飛行時間がさほど長くないので、十分な時間の睡眠もとることはできない。また、今回は、インドネシア国内の移動に航空便を数多く使うため、国内の航空運賃が高くなる。国内航空運賃の高さに比べれば、インドネシアの物価自体は安いので、十分に楽しむことができる。国内線に目を向ければ、デンパサールからスマランまでの直通はないため、一端ジャカルタに到着、そこで 1 時間 10 分後にスマランまでの航空機に乗り換え、午後 8 時 50 分にスマランに到着した。最終目的地のホテルに着いたのが午後 10 時前であった。このように、ジャワ島の中部ジャワ州の中心地スマランといえども、福岡空港出発から目的地到着までには 30 時間程度かかっている。到着まですでに 4 回の航空便を利用している。そこからジャワ海の中部に浮かぶカリムンジャワ島往復で航空機を使い、帰途では、スマランからスラバヤ経由でデンパサールまで国内航空便を利用している。国際便が 4 回、国内便が 6 回で、計 10 回の航空便を利用したことになる。今までに航空機に搭乗した経験のない学生にとっては航空機での旅がどのようなものが十分に理解できたはずである。

二つめの特徴は、ESD に関わる要素がこのスタディツアーに数多く含まれていることである。詳しくは第 2 節で説明する予定であるが、三宅ゼミが ESD、SDGs や環境教育を学習していることからフィールドで数多くの ESD 的要素を学べることは非常に重要であった。

第 2 節 それぞれの訪問場所に見られる ESD 的視点

今回のスタディツアーで ESD に関連する要素（方法、価値、能力）がある訪問場所を選び、そこではどのような ESD が学習できるのかを紹介したい。そのために、まず、訪問場所を持続可能な開発（Sustainable Development）の構成分野である環境面、経済面と社会・文化面に分

類したい。

まず、環境面として分類できるのは、プカロンガン市の浸水地区視察とマングローブ公園見学、パラ島ソーラーパネル視察、パラ島からカリムンジャワ本島までの海域でのシュノーケリングによるサンゴ礁の観察、スマラン市ジョンプラン地区観察（河川の投棄廃棄物やコンポスト作り）、スマラン市のエコスクール視察、バリ島での棚田見学である。

また、経済面では、スマラン市のカンブン・プランギ（壁画村）視察、社会・文化面としては、バリ島ウブド王宮でのバリ舞踊「ラーマーヤナ」鑑賞及びインドネシア料理を食したことである。では、次に、前述の三側面から見ての訪問場所を紹介したい。時には三宅ゼミ論集に見られる学生の文章を使用しながら、そこにはESDに関連するどのような要素が見られるのかを述べたい。

1. 環境面に分類される訪問場所

(1) プカロンガン市浸水地区の視察と住民との交流

3日目に訪問したプカロンガン市のバンデンガン浸水地区の視察では、プカロンガン大学の学生に通訳してもらい、ゼミの学生たちは2グループに分かれ、浸水地区を視察している。浸水は、地球温暖化による海面上昇の影響もあるかもしれないが、詳しいことは解明されていない。近年、徐々に、水面が上昇し、同地区にまで浸水するようになった。一階部分が浸水してしまい、人が住める状態ではなかったような家屋を発見すると同時に、住民の話では、今までに1回目は1m、2回目は40cmと盛り土により計2回床を高くし、一度に16万ルピア（1円＝130ルピア）の費用をかけている。「公衆トイレの床も底上げがなされ、屋根が地面からとても近く、とてもいびつなトイレになっている」（北九州市立大学三宅ゼミ論集編集委員会 2020-109）とゼミ学生は観察している。

経済面との関連性で言えば、農業を主要な職業としていた住民は、浸水後は畑地が水に浸かったため、海藻の養殖を行い、寒天や化粧品原料として販売しだした。浸水対策として政府は堤防の建設を行っている。一度に高いものを完成させるのではなく、水位の上昇に合わせて徐々に高くしていくといった方法である。堤防が築かれたまではよかったが、水位が上昇するにつれ、水流が変化し、別の地域が浸水の被害を受けることになった。さらに、内側が一度浸水すれば、堤防により、水が外部に流れなくなり、堤防の中が浸水状態のまま、生活ごみや汚水などが混ざり、衛生上、非常に不潔な状態になっていると言われる。

国際NGOである「地球の友」Japanがスラマン市に事務所を構える環境NGO「BINTARI財団」の協力を得て、洪水による被害調査を行うと同時にマングローブの植林活動を行っている。マングローブ公園見学では、マングローブの生態を観察し、マングローブが二酸化炭素の吸収や高潮対策への効果があるといった役割を知った。同時に、住民との交流会で女子学生が、「あと1m水位が上がっても住み続けますか？」といった質問に対して、住民の多くが「住み続ける」

と答えたのには驚きを隠せず、思わず、その理由を尋ねたところ、今あるコミュニティ内の信頼関係の大切さや経済的な問題で他の地域に移動するという選択肢はないからとの回答を引き出している。ゼミの学生たちは、堤防の視察のためにボートに乗り、視察を終えた際に、関西の大学から来ていた日本人大学生と偶然会っている。彼ら・彼女らと話す中で、彼ら・彼女らが国際 NGO のマングローブ植林事業に共感し、この地にやってきてこの辺りに宿泊しながら、毎日半日かけてマングローブの植林作業を行っていることを知った。ゼミの学生自らが浸水問題をようやく理解しだしたのに比べ、すでに同じ年代の日本人大学生は植林活動を行っていること、すなわち、住民の生活を守るために少しでも行動に訴えていることを知り、本ツアーを通しての環境学習のこの後の自らの行動のことを考える好機となった。

(2) パラン島の太陽光発電設備の視察

パラン島はカリムンジャワ本島から小さな漁船で2時間ほど行ったところに浮かぶカリムンジャワ諸島の西北端にある小島である。そこを訪問した目的は DANIDA (Danish International Development Agency: デンマーク国際開発庁) の支援を得て BINTARI 財団が設置した太陽光発電装置がどのように住民たちの生活に恩恵を与えているかを知ることにあつた。島に向かう途中、携帯電話の電波は届かなくなり、島でも携帯電話用のアンテナはないために携帯電話が使えない生活を学生たちは体験した。また、島には外部からの客用の宿泊施設はなく、学生たちが宿泊したのは住民たちが学生たちのために提供した自らの住居であつた。それ故に、生活臭が感じられ、夜には蚊が多く、暑くてまともに眠ることができない状態であつた。

かといって、学生は誰一人不平不満を声高く叫ぶ者はおらず、住居を提供してもらった住民に感謝の意を表していた。内心、携帯電話も使用できず、エアコンもない生活環境の中に入れられ、かなりの不満を持っていたと思われる。インドネシアにもこのような世界があるのだと理解できたことであろう。電気エネルギーについては、住民たちは当初はカリムンジャワ本島もしくはジャワ島のジュパラ市から重油を買ってきて発電し、かなりの費用がかかっていたが、太陽光発電ができて以降、十分電気を使うことができるようになったとのことである。重油を燃焼させることで発生する二酸化炭素の排出量の削減、電気料金の抑制及び太陽光発電による電力の安定供給などが可能になった。

(3) ジャワ海でのサンゴ礁の観察

次の環境面での訪問場所は、パラン島からカリムンジャワ本島への帰途に立ち寄った海域で、そこにはサンゴが所狭しと棲息、サンゴ礁を形成していた。ライフジャケットを着て、シュノーケリングを楽しんだ。その地を記述した学生の文章には、シュノーケリング初体験であり、はじめは足ひれ(フィン)の感覚や海の冷たさに驚いていたが、ガイドの指す先に存在するサン

ゴ礁や熱帯魚に目を向けることができ、午後に出かけた海域では船の上からウミガメが観察できたこと、その海の透明さに感動したこと、ディズニー映画で有名になったカクレクマノミやナンヨウハギも観察できたことで個人的に非常にうれしさを感じたと論じている（三宅ゼミ論集編集委員会 2020-104）。

サンゴ礁は海中で二酸化炭素を吸収することで重要な役割を果たしている。よって、かけがえのない自然の美しさや重要性に気づくことで、人は自然の一部であるといったESDの価値を理解できたことであろう。

（4）スマラン市ジョンブラン地区での観察・聞き取り調査

スマラン市に帰ってきてジョンブラン地区を訪問している。ジョンブラン地区は2001年10月1日から2004年3月31日までKITA（北九州国際技術協力協会）がJICAの開発パートナー事業を行っていた地区である。当時の目的は豆腐工場からの排水処理の徹底化と環境教育による住民の環境意識の向上であった。また、その後、高倉式コンポストを導入し、廃棄物問題の解決の糸口を探ろうとした。筆者自身、前者の事業において環境教育を担当する専門家としてたびたび同地区を訪れていた経験から、現在の状況を知りたいと考え、同地区の訪問を通じて学生たちに観察及び聞き取り調査を行ってもらった。

少し長くなるが、当時の事業の最終評価を行ったJICA職員作成の環境教育に関する評価を紹介しよう（独立行政法人国際協力機構アジア第一部東南アジア課 2004）。

活動実績に関しては、次のように書かれている。

環境教育活動を始めるに当たり、環境政策や環境法令の調査、ジョンブラン地区の生活環境調査を先行して行い、また教育現場でどのように環境教育が取り組まれているかヒアリング調査も行われた。その後、公民館や小学校において環境セミナー・ワークショップを実施した。また、JICA環境政策専門家の協力も得ながら副読本の製作も行なった。同時に環境教育の一環として小学生や地元住民、日本の大学生が参加し河川清掃活動を実施した。清掃活動にはKITA（7名）、BINTARI財団（10名）、グマンサリ小学校生徒（55名）、ディボネゴロ大学学生（15名）、日本の大学生（8名）の計95名の参加を得た。また、河川周辺にゴミ捨て禁止看板を設置し、環境への意識向上に努め、ごみ減量の目的として買い物袋持参運動や生ゴミのコンポスト化普及運動を実施した。その他、日本の大学生による環境ツアーを開催し、また日本の学生をインターンとして受け入れ学生間の意見交換会を実施した。ワヤンガン劇による環境教育の劇の作成実演を行った（8ページ）。

さらに、成果の達成状況については、次のように述べられている。

小学生向けに環境副読本が完成しておりジョンブラン地区の小学校に配布されている。併せて指導者向けの指導書、環境教育アクティビティ集等も作成されて実際の教育現場で使用されている。その他、婦人会による買い物袋の製作販売、生ゴミのコンポスト化等によるごみの減量化運動などが行われるなど、環

境教育が教育現場と住民に根付きつつあり、「住民に環境保全意識が芽生える」という成果は達成したといえる (8 ページ)。

このような比較的高い評価を受けていたが、15 年たった今を知ることは、継続的に取り組みがなされているといった ESD の価値の点からいえば非常に重要である。結果として、ジョンプラン地区の河川の中には以前ほどではないが、数多くのゴミがいまだに捨てられており、環境意識がかなり向上したとは言えない。高倉式コンポストの継続的使用では、すでに行っていない世帯が大半だった。理由を尋ねると、バスケットが壊れてからは行っていない、面倒くさくなった、コンポストを作っても買い取り手がいないなどが指摘された。学生たちは河川のごみの多さにショックを受けると同時に、人々の環境意識の変化の難しさを知ることになった。

(5) スマラン市のエコスクールの視察

訪問したエコスクールはスマラン市の東部に位置する。インドネシアには、環境配慮がなされた学校に対して表彰し、継続的な補助金を付与するというアディウィヤタ (Adiwiyata) 制度がある⁷。市レベル、州レベル、国レベルに分かれており、国レベルのアディウィヤタに選ばれば、補助金もかなり受け取ることができ、教育内容や教師の質を向上させることができる。学生たちが訪れた中学校には、コンポストづくり、生徒が家から持ってきたゴミ (有価廃棄物) を換金化するゴミ銀行の運営、雨水を利用したカリフラワーなどの菜園が見られた。

(6) バリ島の棚田視察

ジャワ島やバリ島は日本と地形が似ており、山が多く、中には活火山も見られる。そのような中山間地域の農地として棚田が開拓されている。条件が悪い場所でも人間の手によって改良され、役立つようにするといった典型である。現在は、観光客を引き寄せるという観光業の対象ともなっている。その眺望の良さは人間と自然が調和して作られた一種の芸術品とも言える。九州にもたくさんあるが、これほど、市街地から近くにある棚田はない。これは ESD の農業と観光業を組み合わせた経済面にも関連する。

このように、環境面は多数の場所で観測できる。いかにインドネシアが多種多様な自然環境にあるかが理解できる。

2. 経済面に分類される訪問場所

(1) カンプン・プランギ (壁画村)

ここは、インスタ映えするスポットとして現在人気を集め、スマラン市の観光名所となっている⁸。元来、この地区はウォノサリ村という名称であり、墓地の裏に形成されたスラム地区であった。廃棄物処分場でもあり、衛生状態も劣悪で、同地区に暮らす人々の経済状態は悪かつ

た。同地区の改善を目指して、当時のヘンドラル・スマラン市長と村の有志のスラメット・ウィドドが、村中の壁や屋根に色を塗ることを提案した。最初は多くの住民が反対したものの、今後、村が注目されて観光地となれば、市や企業からの支援が見込め、住民の生活も改善するとの説明を行った。結局、住民は嫌々ながらも壁や屋根に色を塗ることを了承した。

スマラン市長は市内の企業等にも CSR（社会貢献）として寄付を呼びかけ 2017 年に同地区の色塗りが始まった。村の人たちだけでなく若いアーティストも大勢加わり、町中にアートを施した。その結果、ウォノサリ村はカラフルな町に生まれ変わり、カンブン・プランギ（虹の村）と呼ばれるようになった。数ヶ月後、変貌ぶりが人々の耳に入り、カンブン・プランギに観光客が訪れるようになると、住民は観光客向けに売店や飲食店を開くなど経済が活性化し、現在では村が潤い始めている。また、ゴミやプラスチックを再利用して花飾りや装飾を作るなどこれまでになかった活動や内職を始める主婦たちも生まれ、住民の生活が豊かになっている。今後は、近辺に公園やフードコートも建設される予定だと言われている。これは、ESD の要素としては、皆が協力し、環境改善を行うと同時に経済的向上にも連動している典型的な事例である。

3. 社会・文化面での訪問場所

(1) バリ島ウブドの王宮でのバリ舞踊鑑賞

バリ島の住民の大半はヒンドゥ教徒であり、インドに源を発する古代インドの大長編叙事詩であり、ヒンドゥ教の聖典の一つとも言われているラーマーヤナは、バリ島の山間部に位置するウブドの王宮でバリの伝統舞踊として夜に演じられる。物語は、ラーマ王子が誘拐された妻シーターを救出するために数多くの冒険をするといった内容である。英語で書かれた舞踊のあらすじの紙が配られていたが、学生がどこまで理解できたかは定かではない。宗教は社会生活に色濃く入り込んでいるので、ヒンドゥ教とラーマーヤナの事前学習はしておくべきだったと考えている（イスラーム教やヒンドゥ教といった宗教については事前学習で少し学習した）。大半の観光客が外国人なので、表現方法に趣向を凝らしているかもしれないが、伝統舞踊は 2 時間程度続き、ガムラン音楽に合わせ、かなり迫力があり、最後まで退屈せずに鑑賞できた。

(2) インドネシアでの食事

食事は当地の食文化を知ることで非常に重要な要素である。学生たちは、辛い味付けのものが多かったこと、バイキング形式の朝食では必ずお米や「えびせん」のようなもの（クルプック）があり、それを食べることで辛さを緩和させたこと、2 日目の朝食、6 日目の夕食、7 日目の朝食ではインドネシア料理が出され、全般的に、魚料理が多く、日本人の口にとても合うものであることを知った。スタディツアー中にナシゴレン（インドネシア風チャーハン）を気に入っ

た学生が多くいて、自由に注文していいレストランではナシゴレンを注文している者が多かったとの発見もしている。

さらに、「驚いたことは、鳩肉や蛇肉を食べることであり、鳩肉の場合、頭がそのままついているのに抵抗があった」とは女子学生の声である。変わっていると感じたことは、様々な種類の料理の小皿が並び、その中から食べた分だけお金が取られるというシステムだったが、初めての体験で面白い」(北九州市立大学三宅ゼミ論集編集委員会、2020-115)と感じている。これは、パダン料理(パダンはスマトラ島にある地名)である⁹。

ここでは、インドネシア料理の味が日本人の口にあうこと及びパダン料理の会計の仕方のユニークさを発見している。文化的多様性を理解したのである。

第3章 スタディツアー後の学生の感想を通しての学生の ESD 理解

第1節 ツアー開始前に設定した目標

スタディツアーは共通の目的を持つと同時に、個人がツアーに寄せる思いもある。よって、出発前に、参加学生個人の目標・意気込みを聞いた。その結果が以下のようなものである(ただし、参加者個人の本名を使用せずに、イニシャルで表すことにした)¹⁰。また、彼らや彼女たちがたてた目標や意気込みは第1章第1節で示したような ESD のどのような要素(方法・能力・価値観)と関係しているかを記した。

Y.U.:自分たちが住んでいる日本という国と途上国の違いを楽しむ。{方法4}{能力4}{価値6}

K.S.:本研修のリーダーとして皆を頑張ってもらえる。{能力5}

M.I.:ネットなどの情報を鵜呑みにせず、現地の状況を自分の目で把握する。{方法1}{方法5}
{能力1}{能力2}

T.Y.:インドネシアの様々な文化を知る。{能力1}{価値6}

N.N.:現地の人々と積極的にコミュニケーションをとる。{方法1}{方法4}{能力3}{能力4}

H.N.:初のインドネシアなので、日本との生活にどのような違いがあるかを知る。{方法4}
{能力4}{価値6}

N.K.:慣れないことに挑戦することをためらわずに、思いっきり楽しむ。{能力9}

N.A.:インドネシアの良いところと悪いところを知ることができるようにする。{能力2}{価値6}

M.S.①:途上国のライフラインがどのようになっているかをしっかりと学習する。また、インドネシアと日本の違いを理解する。{方法4}{能力4}{価値6}

M.S.②:体調を崩さないようにし、学びの多い研修にする。{方法4}

R.N.:インドネシアの様々な問題を自分の目で見て現状を知る。{方法1}{方法5}{能力1}
{能力2}{価値6}

K.I. : 普段と違う環境での生活を楽しみつつも、多くのことを吸収する。また、インドネシアが抱える問題をしっかりと把握する。{方法4} {能力1} {能力2} {能力4} {価値6}

H.W. : インドネシアの文化を感じて色んな人と交流して、様々なことを得る。{方法1} {方法4} {能力1} {能力4} {価値6}

以上のように、方法では、1、4、5が占め、能力では、1、2、4、9が占め、価値では、6となっている。このような結果は、インドネシアは未知の国であるので、今まで知らない、知らなかったこと、特に多様性への好奇心や興味が出てきたことによるものと考えられる。

第2節 スタディツアーの事後感想文に見る参加学生とESDとの関連性

前章では訪問場所がどのようなESDの方法・能力・価値と関係しているかを示したが、では、それぞれを訪問した学生たちはどのようなESDの要素を身につけたのであろうか？そのことを分析・考察したい。

1. 分析の内容及方法

分析内容は次の3つである。最初に、参加学生がスタディツアー後に書いた感想文をもとに、事前にたてていた目標をどれほど覚えており、またそれをどれぐらい達成できたのかを感想文の中から読み取りたい¹¹。次に、感想文を通してどのような訪問場所や事項が学生たちに衝撃や影響を与えたのかを調べ、最後に、そこには表れてこない重要な語句を抽出することで、どのような価値学習を行ったかを考察したい。

2. 結果と考察

最初に、分析したいのは学生たちが事前に立てた目標がどこまで達成されたかである。Y.U.は事前目標として「日本とインドネシアの相違を楽しむ」と記しているが、この楽しむとは、未知のことを知り、理解し、積極的に感情や態度に表すと理解すれば、感想文中には、「そこで見た舞踊はレコンダンスというもので、一中略とても幻想的な雰囲気だった。体の動きから表情まで全身を使って表現しており、ぐっと引き込まれる素晴らしいダンスだった」からも、かなり注意深い観察力でもって舞踊を理解しようとしている態度が見て取れる。「最後に、一番感じたことは現地の人たちがとても親切だったということだ。よく笑い気兼ねなく話しかけてくるような陽気で楽観的な性格で言語の壁はあるけれど、話していて楽しかった。」と素直にその楽しさを表現している。

次に、K.S.は目標に「本研修のリーダーとして皆を頑張ってもらえる」としていたが、感想文では、「ビンタリの方々との連絡を三宅先生に任せきりになってしまったのでそこが反省点と

して挙げられる。このような反省点はあるが、ピンタリの方々や H.W. さんのお陰で現地に着いてからの進行、皆の引率はうまくいったと思うので、総じて今研修の代表としての仕事は全う出来た」との文章から、目標を達成したと自己評価している。M.I. は、「ネットなどの情報を鵜呑みにせず、現地の状況を自分の目で把握する」との目標をたてており、結果は、「たこ焼きは、ソースがチリソースであつたり中が空洞になっていたりと大きく違っていた。これらのことから食べ物ひとつでも、認識や価値が国によって違うことが良く分かった」といった文章から、現状をきちんと自分の眼で把握していることが理解でき、ある程度の目標を達成したのではなかろうか。次の T.Y. は、「インドネシアの様々な文化を知る」との目標をたてた。結果は、自らの感想文の中で、「当初の自分の目標だった『文化を知る』は実に体験できたといえる」との文章で証明されるように、きちんと目標を覚えており、特に、日常的に関心を抱いている食文化の解説をするほどに、食文化のことを伝えている。N.N. の場合、目標は、現地の人々と積極的にコミュニケーションをとるであった。「ジョンブラン地区の豆腐工場では従業員に質問をする機会があった。そこで『豆腐は日本の食べ物だと思うが、いつからインドネシアに入ってきたのか』と質問した」との感想文の文章があり、少しはコミュニケーションをとってはいるが、積極的に取ったかどうかを示す文章は他になかった。したがって、目標を完璧に達成したかには疑問が残る。

H.N. は、「初のインドネシアなので、日本との生活にどのような違いがあるかを知る」ことであり、感想文には、印象に残ったこととして、宗教の違いにおける生活習慣の違いをあげ、具体的には、特にヒジャブ（イスラーム教の女性のスカーフ）について色や種類の多種多様性を指摘している。さらには、トイレや街並みの違いにも触れていることから、目標は完璧に達成できたものと考えられる。N.K. の「慣れないことに挑戦することをためらわずに、思いっきり楽しむ」といった目標は、「初めインドネシアの場所さえ知らなかった」状態であったが、「初めて海外に長期滞在し、ただの旅行では体験できないことをたくさん体験でき、本当に言うてよかったと思える」との文章から理解できるように、ほぼ達成できたのではなかろうか。「インドネシアの良いところと悪いところを知ることができるようにする」との目標を N.A. はたてていた。結果は、「働いていても陽気な雰囲気は変わらず、私もこんな場所で働きたいと強く思った。そういった明るい面だけでなく、やはりお金を路上で求めてくる女性や汲み取り式のトイレや蔓延するマラリアなど、途上国的な課題も多く見る事ができた」といった文章に見られるように、ある程度の目標は達成できたと考えられる。

3年生の M.S. の場合、「途上国のライフラインがどのようになっているかをしっかりと学習する。また、インドネシアと日本の違いを理解する」といった目標をたてていた。ライフラインについては、パラン島で、ソーラーパネルの見学、「シャワーも水しか出ない」としか書かれていなく、意識的にライフラインを調査しようとした形跡はない。ただし、日本との違いをにお

わせる表現は数多く見られた。「体調を崩さないようにし、学びの多い研修にする」といった目標をたてていた M.S. は、感想文では体調については何も書かれていないが、実際は、バリ島で発熱し風邪のような症状になっていた。しかし、他の目標である学び多き研修については、ジョングラン調査の結果に関わる文章から理解できるように、熟考して数多くを学んだことを示すような表現がある。よって、目標は半分程度達成できたのではと思う。R.N. の目標は、「インドネシアの様々な問題を自分の目で見て現状を知る」であった。印象に残ったことの一つに現地の人々へのインタビューを通して、「環境にとって悪いことと理解していながらも大量のゴミをどう処理すればいいのかわかっていないというような印象を受けた」「3人乗り4人乗りのバイクが当たり前であったりと、日本では考えられないような生活をしていた」といった表現から、自分の目や耳で感じ取ったことはかなり多いのではないだろうか。

K.I. は、「普段と違う環境での生活をしみつつも、多くのことを吸収する。また、インドネシアが抱える問題をしっかりと把握する」ことを目標にたてた。生活環境については負の要素が多かったため、衝撃を受けているが、「他国の言語にも触れることができ、多くのことを吸収し、自身の経験値を増やすことができた」との回答に直結する文章を見ると、目標は達成できたのではないかと思われる。最後に、「インドネシアの文化を感じて色んな人と交流して、様々なことを得る」との目標をたてた H.W. の場合は、大学生との交流の中での英語能力の差を感じ、「向こうの学生は積極的に話しかけてくるのに対し、受け手になりがちで少し申し訳ない気持ちとなった」「ホテルのレセプションとのミスコミュニケーションも反省点である」と述べているように、目標を完璧には達成できなかった。全員の目標とその達成度を述べたが、総じて、かなりのものが目標を達成したのではないかと考えられる。

次の分析内容は、どのような訪問場所や事項が学生たちに衝撃や影響を与えたかであり、感想文から調べてみた。結果は表1の通りである。まず、プカロンガンでの浸水状態を感想文中に記しているのが13人中7人いる。日本でも豪雨による鉄砲水のために河川が氾濫し、洪水状態になるが、プカロンガンでは徐々に海面が上がってきている。住居の一階部分にまで水が押し寄せ、その前で人は無力にならざるを得ないことが学生たちの記憶に残ったのかもしれない。次は、ジョングラン地区である。住民との交流やディボヌゴロ大学の学生との共同調査、幅が10mもない狭い河川でのごみの多さといった事項が学生たちに衝撃を与えたのであろう。ジャワ海サンゴ礁の観察や食事がその次の順位に来る。サンゴ礁や熱帯魚を見て、自らが自然の一部と感ずることができるというESDの価値にもつながる。その他では、イスラーム教に関するもの、生活環境の中でもトイレに驚いている。インドネシアのトイレは、通常は沐浴場と一緒にあり、水を貯める水溜があり、そこから、トイレ用と風呂用に分け、水をかける。日本のワンルームマンションのユニットバスに慣れ親しんでいる学生にとって、非常に衝撃的だったと考えられる。

2019 インドネシア・スタディツアーに観る ESD
 (持続可能な開発のための教育) の概念の理解に関する研究

表 1 感想文で触れている訪問場所・事項

	プカロンガン	パラン島	ジャワ海 サンゴ礁 観覧	ジョンブラン	エコ スクール 視察	バリ島棚田 見学	バリ舞踏 鑑賞	カンブン・ プランギ (藍画村)	食事	住民・ 学生交流	その他	その他の具体的内容
Y.U.	●	●	●	●			●					
K.S.	●		●								●	イスラム教寺院
T.Y.									●		●	生活：トイレ
C.A.											●	イスラム教スカーフ、 トイレ、大気汚染
H.N.											●	環境意識の高さ
N.N.	●			●							●	
N.K.	●		●						●			
N.A.	●								●			
M.I.			●						●			
M.S.	●	●		●						●		
R.N.				●							●	生活：トイレ、 環境意識の低さ
M.S.	●			●								
K.I.											●	生活環境意識の低さ、 明るい国民性

出所：三宅ゼミ論集編集委員会（2020）「2019（令和元）年度北九州市立大学法学部政策科学科三宅ゼミ活動報告書」より筆者作成。

最後の分析は、上記に表れてこなかった重要な語句を各学生の感想文の中から抽出することで、どのような方法を活用し、価値観や能力を養うことができたのかを解明したい。感想文は自由形式なので、中には記載していないものもあった。よって、ここでは価値観や能力と解釈できる言葉を使用している感想文を取り上げ、紹介したい。

Y.U. は、現地の人々の親切さやよく笑うことなどに共感し、日本を訪問する外国人観光客に笑顔で接することができるように心がけていきたいといった将来的希望を述べており、これは、方法で言えば、7. 関わる人が互いに学びあえるに該当すると同時に、能力では、3. 気持ちや考えを表現する力に相当する。C.A. は、元来、潔癖症・心配性で腹痛を起こしやすく、「水には細心の注意を」「蚊には絶対刺されないように！マラリア対策を」などの日本の雑誌記事を見るために、不安を抱え、悩んでいたそうである。しかし、現地の人々がそこで暮らしていて、彼らなりに工夫して生活している様子を見たときに、安心して同じように行動できたこと（トイレの便器も掃除が行き届き、綺麗だったので、裸足で入ることができた）を記し、今では、それらの心配を笑い話として受け取るようにしているそうである。ここには、方法としては、1. 参加型体験の手法が活かされている、能力では、1. 自分で感じ考え抜く力、価値観では、6. 文化

的な多様性を尊重するに該当する。

N.K. は、感想文で「カリムンジャワ島（筆者注：諸島の中の一つのパラシ島）では、初めてwifiがつかない場所に行き、携帯が使えないという状況に陥った。はじめは不便で仕方なかったが、島の海や星空は今まで見た中でいちばん綺麗で、携帯のことなどどうでもよくなった。いつも携帯に依存しすぎていることに気づく良い機会となった。そこでは電気をソーラーパネルによる発電に頼っており、電気が使えない時間帯など多少の規制はあるが、いくつかのソーラーパネルで島全体の電気を賄っているとは驚きだった」として、一方では携帯電話という科学技術の進歩が凝縮されたものがなくても島の生活は美しい海や星空といった自然の中で成り立っているが、他方では環境に配慮したと言われる太陽光発電による科学技術の恩恵を享受することで、生活が成り立っていることを認識し、時代の流れ＝歴史の進歩・発展というものを実感している。これは、方法では、6. 人や地域の可能性を最大限に生かしている、8. ただ一つの正解をあらかじめ用意しない、育みたい能力では、2. 問題の本質を見抜く力・批判する思考力、8. 地域や国、地球の環境容量を理解する力、価値観では、3. 現世代は将来世代に責任を持っている、5. 人は自然の一部であるに該当する。

最後に3年生のM.S.②は、カウンターパートであった環境NGOのBINTARIの環境改善支援活動を間近に見ることで、実際に海外で活動しているNGOがこのように現地で活躍していることも初めて実感したので、海外でのボランティア活動やNGOに対して興味を抱いたという。ここには、方法として「2. 現実的課題に実践的に取り組んでいる」BINTARIのプロジェクトの中で学習を行うことができたということが示されている。

総じて、実際にフィールドを訪れることによって、各参加学生は意識的にではないにしろESDに関する様々な要素を学習しえたことが上記で理解できた。インドネシアという国が持つ最高の資源や最高の力といっても過言ではなからう。参加学生たちは、当然、そのことにも気付いていた。

おわりに

今回のインドネシア・スタディツアーは、インドネシアのスラバヤ市にある環境NGOのBINTARI財団の協力によって実現できた¹²。このスタディツアーは、筆者が大学院生時代に社会地理学を専攻していたため、指導教官やゼミ所属の学部生たちとインド、バングラデシュなどに出かけた経験を活かしその延長線上に位置づけることができる。よって、北九州市立大学に赴任して以降も、学生たちと一緒に海外に出かけることができたわけである。大学院が位置していた東京では海外スタディツアーは当たり前であったことが、九州では当たり前にはなっていなかった。国内外を問わず、フィールドは、教員が教えるより、様々なことを語ってくれる。特に環境教育やESDの場合、なおさらそれを感じることだろう。実際、2019年9月の三宅ゼミ

2019 インドネシア・スタディツアーに観る ESD
(持続可能な開発のための教育) の概念の理解に関する研究

インドネシア・スタディツアーの事後報告書内に表されている感想文がそのエビデンスとなりうる。

よって、本論では感想文を分析することで、どのような ESD の要素を学習・体得したのかを明らかにした。結果的に ESD の方法、能力および価値観の様々な要素を学生たちは獲得した。しかし、インドネシアで獲得した要素は、あくまで学習過程の途中である。事実、帰国後、持続可能な社会構築のためにどのような形の行動に移したかが問われる。2020 年度、本学は、4 月には対面授業があったものの、5 月以降は、新型コロナ感染拡大予防の観点から、全面的に web 授業になった。2 学期には一時、学外活動が許可され、その間に、2019 年にインドネシアを訪問したゼミ生は、インドネシアで学習・体得した ESD の要素をもって、行動に移すといった試みを行った者もいた。食品ロス削減学生プロジェクトを例にとると、例年のフード・ドライブに代わり、フード・パントリー（賞味期限に近い、集められた食品を必要とされる人々や福祉団体に寄贈）を実施した。また、先のライフアゲインと連携して、「北九州市もったいないっちゃ!すごろく」をボードゲームとして製作し、SDGs の普及をはかろうとしている。このように、インドネシアでの学習効果は現在にも活かされていて、いわば、まなびの継続性を担保しているのである。

とはいえ、国連 SDGs や ESD for 2030 の目標年は、当面、2030 年であり、あと 10 年しか残されていない。今回のインドネシア・スタディツアー参加者である学生たちが、残りの期間、あるいはそれ以降も継続して自己変容、さらには社会変容を追求する必要性があるのは自明のことである。

注

¹ 特定非営利法人 持続可能な開発のための教育の 10 年推進会議 (ESD-J) 2006 『ESD がわかる』(「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」キックオフブック) の中で、ESD-J が考える“未来をつくる教育”3つのポイントワークシートに記されている。筆者自身、本ワークシートはチェック項目として優れていると考えているので、ここに引用したまでである。ただし、ESD-J によれば、これはあくまで作成途中のものであるという断り書きも付け加えておきたい。

(<http://www.esd-j.org/wp/wp-content/uploads/2012/05/esdgawakaru.pdf> 2021 年 1 月 10 日アクセス)

² 日本ユネスコ国内委員会によれば、ESD の頂点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)として、①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的・総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑤他者と協力する力、⑥つながりを尊重する力、⑦進んで参加する態度があげられている。

(ユネスコ国内委員会 平成 30 年『ESD (持続可能な開発のための教育) 推進の手引』

<http://www.mext.go.jp/unesco/004/-icsFiles/2020年1月20日アクセス>)

- 3 当初は小倉北区大手町のアジア女性交流研究フォーラム内に事務所があったが、八幡東区東田の東田エコクラブを経て現在の小倉北区魚町銀天街のまなびと ESD ステーション内へと移り変わった。
- 4 実施内容については、北九州市立大学三宅ゼミ論集編集委員会（2021）『2020 年度北九州市立大学法学部政策科学科三宅ゼミ活動報告書』を参照のこと。
- 5 フードバンク北九州ライフアゲインの SDGs 教育の一部の取組みとして扱うことになっている。
- 6 2020 年 9 月にバリ島だけを訪問地としたスタディツアーを計画し、1 月に旅行代理店を通じてシンガポール經由福岡ーデンパサール往復の航空券を 4 万 4 千円で購入した。通常、シンガポール航空の航空券は 8 万円から 11 万円である。格安のため、出発日のかなり前から購入せざるをえなかった。しかし、4 月あたりから新型コロナウイルス感染患者数が日本やインドネシアでも徐々に増加してきたため、結局、ツアーは中止となった。
- 7 Adiwiyata 制度については、児玉弥生 2017 「インドネシアにおける環境教育 Adiwiyata School Program に注目して」（『北九州市立大学文学部紀要』第 24 巻）に詳しい。
- 8 壁画村で有名なのは、韓国の統営市にあるトンピラン地区である。三宅ゼミの 1 年生韓国スタディツアーでは毎年出かけている。トンピラン地区は低所得者層が多住しており、再開発の対象になっていたが、NGO が中心となり、住民たちと再開発に反対し、2007 年に壁画プロジェクトをはじめ、壁画を通じたまちおこしを行った。観光客が集まりだすことによって、再開発計画は中止となった。同地区は韓国ドラマや映画のロケ地としても有名である。
- 9 バングラデシュ研究を行っている筆者がインドネシアを訪問し、最初にパダン料理店に入った際に、テーブルの上に料理が次々に出されるのを見て、インドネシア人の知人に「こんなにたくさん頼んでいない。こんなに食べきれないし、誰がお金を払うの」と攻撃的な口調で問いかけたことを思い出す。パダン料理の説明を聞くと、食べたものだけ、料金を払うシステムだという。一皿に煮魚が二匹入って出され、一匹食したとしても、一匹分の料金を支払うだけでいいというシステムである。当時、非常に合理的な考えに基づいていると思っていたが、日本では 2008 年 5 月に、高級料亭船場吉兆で食べ残しの料理の使いまわしが発覚し、マスコミでも非難され、廃業に追い込まれたといった事件が起きた。食品の安全性の問題である。現在、新型コロナ禍で会食の際の飛沫が問題となっているが、パダン料理では多くの人々の飛沫が付着しているのは事実であり、インドネシアのパダン料理店ではどのような対策を取っているのかを個人的に知りたい。
- 10 北九州市立大学三宅ゼミ論集の 102 頁に記されているが、一人 C.A. のものは見当たらなかった。
- 11 感想文の書き方は、自由形式にして、分量だけ A4 一枚程度に限定していた。よって、日程順に書いた学生もいれば、印象に残った事項に焦点を絞って執筆していた学生もいた。
- 12 海外スタディツアーについて石川は、「プログラム体験型スタディツアー」と「主体性重視型スタディツアー」に分類している（石川 2020）が、本ツアーは両者の要素を兼ね備えたものである。後者を実現させるには、主催者、参加者と受け入れ側各々が綿密に準備する必要がある。本学の場合、国際教育交流センターが中心となり、プログラム作りに積極的にコミットメントしてもいいのではと個人的に考える。

2019 インドネシア・スタディツアーに観る ESD
(持続可能な開発のための教育) の概念の理解に関する研究

参考文献・資料

- 石川敬之 (2020) 「海外スタディツアーの類型化と参加学生の自主的な学び」『国際論集』第 18 号 PP.89-104。
- 北九州市立大学法学部政策学科三宅ゼミ論集編集委員会 (2020) 『2019 (令和元) 年度北九州市立大学法学部政策科学科三宅ゼミ活動報告書』北九州市立大学三宅ゼミ。
- 児玉弥生 (2017) 「インドネシアにおける環境教育 Adiwiyata School Program に注目して」(『北九州市立大学文学部紀要 (人間科学科)』第 24 巻, PP.17-32。
- 特定非営利法人 持続可能な開発のための教育の 10 年推進会議 (ESD-J) (2006) 『ESD がわかる』(『国連持続可能な開発のための教育の 10 年』キックオフブック)
(<http://www.esd-j.org/wp/wp-content/uploads/2012/05/esdgawakaru.pdf>)
- 独立行政法人国際協力機構アジア第一部東南アジア課 (2004) 『インドネシア国スマラン市モデル河川環境改善プロジェクト (開発パートナー事業) 終了時評価調査報告書』独立行政法人国際協力機構。

CIEE JOURNAL

THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU

No. 19

Social Sciences

Studies on Understanding the Concepts of
ESD (Education for Sustainable Development) through 2019
Study Tour to Indonesia

..... Hiroyuki Miyake 51

Center for International Education and Exchanges
The University of Kitakyushu
March 2021